
紫の迷い人

幻影

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紫の迷い人

【Nコード】

N4325S

【作者名】

幻影

【あらすじ】

「どちら様でしょうか？」 ちよつとずれている極々普通の女子高生のもとに突然現れたのは我が儘で傲慢な皇子様。え、魔王様じゃないんですか？ ノリ90%その他10%な思いつき作品。突然始まって突然終わりました。恋愛何それおいしいの？ 色シリーズ一作目。

（前書き）

ノリしかないです。
すみません。
言い訳は後書きに。

はい、はじめまして。恵と申します。^{めぐみ}

得意科目は理科、国語が大の苦手、運動オンチで体力のない、極々普通の現代っ子女子高生です。

少々人より運がない程度だった、はずなんですけれど。

「——だ、誰でしょうか……？」

突然家の大きな鏡が光って現れた、紫色の綺麗な人に問いかけます。

普通に説明していますけど、内心かなりのパニックです。鏡が光るとか何ですか？ 何でいきなり人が現れるんですか？

まるで幽霊のように鏡からにゅう、と出てきたその人は、値踏みするように私を見ます。

え、あの、どちら様？

「……ふん、世界の狭間を越えた、か。アレも奇妙なことをするな」

切れ長の深い藍色の眼が細められます。うわあ、凄い綺麗な人。

今更ですが、イケメンというやつです。男性です。

服はまるで中世ヨーロッパ。もしくは巷で流行りだとかいう異世界の王子様。でも優しい感じではなく、寧ろ魔王様っぽいです。髪は紫で服も黒、暗い色合いがまさに。

その魔王様もどきなイケメン様はとんでもない威圧感をお持ちのよう
で、私は金魚のように口をぱくぱくするだけ。

怖い、怖いです。不審者な上に威圧感ともうハンパないです。

「あ、あのっ！」

「……ああ、すまないな。知人の悪戯のせいだ。しばらくは帰れない
ようだから世話になるぞ」

そう言っ
て我が物顔で我が家を蹂躪するイケメン様。

「……って、結局貴方はどちら様なんですか!？」

「私はロートウスという。本名は長いので省略するぞ。帝国の第一
皇子だ」

「……」

本当、ですよね……？

イケメン様、もといロートウスさん(?)は無表情な真顔でそう
言います。

普通の私なら信じませんけど、家の鏡は光ったりしませんし、そ
んな服で表を歩く人を見たことなんてありませんし、何より自分の

目を信じます。現実逃避なんて馬鹿のすることですよ。

「知人が仕掛けた罠にはまった。帰れないことはないだろうがあの鏡に魔力は感じられない。それまでしばらく世話になる」

さ、流石皇子様。私に選択肢はないのですね？ 目が「断つたらどうなるかわかっているな？」って言ってますよ恐ろしい。

そして魔力ですか、異世界ですか。なんてベタな…… 流行に乗ったんですね。でも流行に乗るなら私なんかじゃなくて、もう少し面白い人の所へ行ってください。

ベタな展開なら、恋がはじまるものでしょう？

私はもてませんから。隠れ美少女でもなんでもありません。普通に普通の女子高生です。

「えっと……、それは、いつまででしょうか……？」

「今日は満月か？ ならば次に月が満ちるまで」

要するに、結構掛かるんですね！！

そんなこんなで、皇子なイケメンロートウスさんとの生活がはじま……

「って、そんなことあってたまりますか！ 駄目ですよ、ここ親住んでるんですよ？ 異世界では皇子だろうが魔王だろうが関係ないんです！ 変な人はお家に泊めない！！」

常識です。異世界での地位なんて知ったこっちゃないんです。私

には関係ないんです。

はつきりきつぱり言い切った私の顔をまるで珍獣でも見つけたかのように、ロートウスさんは驚いた表情で見えています。今までずっと無表情だったので何だかやってやった感がありますね！

そして、ロートウスさんは口を歪めて笑いました。

……あれ？ 何だかこの展開やばくないですか？ 小説でよく見るぞ？

「ほう？ 私にそんな口を利くか。命知らずな奴だな」

うわあああ！ そっちですか、そっちのパターンですか！？ 「

面白い奴だな」な方ではなかったのですか！！

ヤバイです、選択ミスりましたか。

うわあ、綺麗なお顔が怖いです。

「できればすぐにお帰りください！」

「それが出来ぬから困っているのであろっ？ 少しは頭を使え」

「そちらこそバタバタな展開のくせに肝心な恋愛部分が抜けているなんて、おかしいんです！！」

「知ったことか。私も帰れなければ無駄な執務が溜まるのだぞ？

誰が好き好んでこのような場所に来る？ そもそも私は女が嫌いだ」
「私も貴方みたいな傲慢な方は嫌いです！！」

……口論は夜中まで続き、母親が帰ってきました。家は母子家庭なのです。

そして、今日ほどのほほんとした母親でよかったと思う日はありません。天然嫌いでごめんなさい。見直しました。だって、誤魔化したもの！ 宿泊許可頂いちゃったもの！！

傲慢皇子のロートウスさんは何気に母と打ち解けてました。お酒飲みながら人生語ったりしないでください。家の経済事情ばらさないでください。ロートウスさんもお金持ちのくせにフォロー上手すぎです。お金の稼ぎ方はいいけど悪質な人の騙し方なんて純粋な母に教えないで！？

そんなこんなで数週間。もう満月です。

早いですね。要らない部分はカットです。口論しまくりましたがどカットです。罵りあいなんてカットなんです。夜な夜な繰り広げられる母とロートウスさんの人生相談なんてカットでいいんです。

——そして。

「世話になったな。女は嫌いだがお前の母君の話は中々に興味深かった。民というのはあんな不満を抱えるものなのだ。自国の政治に利用させてもらおう」

「あ、そうですか。それはよかったですね」

そんなことを考えてたんですか。

ロートウスさんの前にはあの大きな鏡。満月は魔力に関係しているらしく、窓から見える月は今まで見たどの月よりもはっきりと浮かんでいるような気がします。

まるで、ロートウスさんを祝福するように、月が浮かんでいます。

「——来た」

ロートウスさんの眩きと共に、鏡が光り輝きます。白い光が部屋中に溢れ出しました。

何故かロートウスさんはすぐに行かず、私の顔をじつと見つめます。無表情なので何を考えているのかわかりません。嫌い嫌いと言われた人に見られると怖いです。

「な、何ですか。帰らないんですか」
「いや……」

じい、と私の顔を見ないでください！
数秒硬直状態が続き、そして何故か笑いました。
はじめて見るような、優しい顔で。

「久しぶりに楽しかった。礼を言おう」
「へ？」

「私は次期皇帝だからな、疲れていたのだ。お前との罵倒のし合いは楽しかった」

ふ、と悪意の一切ない純粹な微笑。
あの、美しい顔でやられると殺傷能力があるんですけど。

「だから礼を言おう。それと——また」
「え……」

私に言葉を告げる暇を与えさせずに、笑ったまま鏡に吸い込まれて消えました。

まるで白昼夢のように——

「ただいま、お母さん」

高校指定の鞆を肩にかけて、玄関のドアを開けながら言います。
お帰り、と気の抜けたような母の声。いつもと同じです。

……そう。いつもと同じ。だから、寂しいなんて気のせい。

「あらあら、もう真っ暗ねえ。月が綺麗だわ」

「……」

月は丸くぼつかりと漆黒の空に浮かんでいます。もうあれから満ち欠けが巡ったんですね。

もう、そんなに経ったんですか。

「そういえば、ろうとうすさんはお元気？　お友達のお兄さんなんでしょう？」

「うん……、多分元気だと思うよ」

そんなこと、知る手段なんてありませんけれど。
でも、そうそうくたばるような人じゃないと思います。

はあ、と自室に入って溜め息を吐きます。大きな鏡は私の平凡な

顔を映すばかり。

「そりゃあ、流石に二回も来ませんよね」

「決め付けは人としての終わりではなかったか？」

突然聞こえた低い声にぎょっとして周りを見回す。誰もいない。
そして、不意に鏡が光り――

「ふん、まったく厄介だな。久しぶりに神経をすり減らしたぞ」

「な、何で……」

「また、と言ったはずだが？」

得意げな妙にイラッとする顔でロートウスさんは言います。でも、それは。

「ここを探すのは苦勞した。世界はすぐに見つかったが、まさかここまで人が多いとは思わなかったな。お前を特定するのにはかなり疲れたぞ。ほら、酒でも出せ」

「な、な、な……」

「折角見つけた憩いの場を、私が手放すとても？」

微笑を携えて、きっと私の初恋の相手であろう王子様はそう言いました。

むかついたので、絶対に教えてあげませんけど。

「え、じゃあまた次の満月ですか？」

「今回は強固に道を繋いでおいた。行き来は自由だ」

「へえ、凄いですね」

「そうだな。またあちらにも来るか？」

「……来い、の間違いではなく？」

「ふん、ならはつきり言おうか。——来い」

（後書き）

うわぁ、やっちゃったぜ。

はじめましてな方ははじめまして。別作品を見ていただいたことがある方にはこんにちははこんばんはおはようございます、幻影です。適当な散文で申し訳ありません。作者のノリがハンパなかったんです。だってテスト嫌いなんだもの。現実逃避したいんだもの。

……すみません。

一応皇子の世界は【古の魔女】という裏設定があります。本編に出す気満々です。

使いまわしじゃないヨ。本当に最初からあっちに出すつもりだったんだヨ。

……痛いのは知ってるさ。

というわけでこの二人はいつかきつと【古の魔女】に出るのでそっちもよろしくね！

そこまで書けるかが問題なわけですからねども。

これに関してはほぼノリだけで書ききったので内容も描写もぐちゃぐちゃです。

そんな散文をここまで読んでくださりありがとうございます！

それでは、また別の作品でお目にかかれることを期待しております。評価は随時お待ちしておりますので「書いてやるぜ」な方はぜひぜひ！でもあんまり作者の心は強くないので優しくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4325s/>

紫の迷い人

2011年11月14日01時35分発行